

第3回

産業革命と世界経済の変化

監修・講師 山根徹也

学習のねらい

18世紀後半からイギリスで産業革命が起き、工業生産力が急速に増大し始め、社会生活が大きく変わり、また資本・賃労働の関係が確立されたこと、これらを通じて現代社会の基礎がつけられたことを学びたい。次に、産業革命によって19世紀には世界経済が大きく変わり、その中で日本の開国とそれに続く日本の産業革命も起きることを把握したい。

keyword

●産業革命の始まり

産業革命／資本主義／時計／労働運動

●世界市場の形成と日本の開国

アヘン戦争／捕鯨／開国

●世界経済の変化と日本の産業革命

製糸業／八幡製鉄所

産業革命の始まり

18世紀後半、イギリスで産業革命が始まった。蒸気機関を原動力とする機械制工場が出現し、工業生産力が格段に増大し始めることになった。この技術革新にともなって、生産の場において資本家が労働者に賃金を支払って労働させる、いわゆる資本・賃労働の関係が確立された。このような近代的な生産の場では効率よく機械を運転するためにも、労働時間管理が厳格になされるようになり、鉄道の普及などともあいまって正確な時間を日常的に意識しなくてはならない生活様式が成立した。低賃金、過重な労働などの問題を背景として、労働運動が成立してくる。それは、労働者が労働組合の結成などを通じて横に連帯し、ときにはストライキなどの団体行動を行うことで使用者と交渉し、問題を解決しようとする運動である。また、鉄道、蒸気船などの実用化により、交通・運輸も飛躍的に発展した。こうして現代社会の生活様式や、社会のありかたの出発点が築かれた。

世界市場の形成と日本の開国

イギリス、それに続いてアメリカ合衆国など欧米諸国で綿工業を軸に産業革命が起きたことは、世界市場の形成につながった。産業革命によって大きな工業生産力を得た欧米諸国は、自国や欧米域内だけではなく地球上のあらゆる地域に製品の市場を求めようになった。この動

このページ掲載の文章・画像の無断転載を固く禁じます。

きは、産業革命で工業生産力を高めた国に有利な自由貿易を拡大する方向につながった。そのような流れのなかで、イギリスは中国に対して貿易拡大を求めてアヘン戦争を起こした。日本の開国もこうした世界市場の形成の一環であった。具体的には、19世紀半ばすぎ、アメリカ合衆国が、産業革命の進展を背景に北太平洋での捕鯨業を展開していたこと、市場を求めてイギリスに対抗しつつ清（中国）との貿易を拡大するために太平洋を横断する航路を開拓しようとしたことが、この国の日本開国要求の背景となった。こうして日本も開国を余儀なくされ、世界市場との接触のなかで大きな社会変動を迎えることになる。

世界経済の変化と日本の産業革命

19世紀後半になると、イギリスに続き、アメリカ、フランス、ドイツなどでも産業革命が進化した。また、この時期は、工業生産の技術革新がそれまでの軽工業部門だけではなく、製鉄業などの重工業で飛躍的に進む、いわゆる第二次産業革命の時代となった。開国後、明治維新を経た日本では、政府の殖産興業政策を背景とし、徐々に機械制工場が導入されていった。こうした日本の工業化において初期の段階で重要な役割を果たしたのは、日本の主要輸出品であった生糸を生産する製糸業であった。そして19世紀末、日清戦争勝利によって多額の賠償金を清から得た日本政府は、官営八幡製鉄所の設立に代表されるような重工業育成政策を採り、これによって日本の産業革命は、部門・技術としては第二次産業革命タイプのものとして本格的に始動することになった。このような重工業の発展は、さらなる工業生産の拡大を支えると同時に、日本の軍備増強と戦争を支えることにもなった。

“探究”してみよう！

- 18世紀後半のイギリスでは、なぜ綿工業の部門で産業革命につながる技術革新があいついだのだろうか。欧米諸国での綿布の需要はどのようだったのだろうか。また、蒸気機関の発明や実用化がいち早くイギリスで進んだ理由はあるのだろうか。考察してみよう。
- 産業革命が始まってからの各国の労働運動は、どのような発展をとげ、現在に至っているだろうか。たとえば労働組合はいつ、どのようにしてでき、発展してきたのだろうか。現代的な諸課題と結びつけて考察し、表現してみよう。
- 明治時代の日本で製糸業の機械制工場が導入されたころ、工場で労働をした人たちはどんな人たちだったのだろうか。なぜその人たちは工場で働く必要があったのだろうか。調べてまとめてみよう。